

# 五十嵐威暢の世界

日本を代表するデザイナーのひとりである五十嵐威暢の展覧会が、10月6日（土）から11月25日（日）にかけて北海道札幌市の札幌芸術の森美術館で開催された。会場には原点ともいえる1973年の個展作品から彫刻家としての最新作まで、代表的なポスター、プロダクト、彫刻、約150点が一堂に会した。

五十嵐威暢は1944年北海道滝川市に生まれ、多摩美術大学卒業後、カリフォルニア大学ロサンゼルス校大学院修士課程に進学。帰国後、企業や店舗のアイデンティティやサイン計画を中心にデザインを行う一方で、製図用ドラフターで描いた立体アルファベットを用いた作品で世界的な注目を集めた。80年代にはプロダクトや環境彫刻まで活動の幅を広げつつ、さまざまなデザイン計画、教育活動にかかわっていく。1994年には彫刻家に転身し、米国ロサンゼルスを拠点に活動。2004年に帰国し、現在、北海道新十津川町のアトリエ「かぜのび」を拠点に作品制作を続けている。

本展はデザイナーおよびアーティストとしてこれまで数々の展示を行ってきた五十嵐にとって、そのキャリア全体を大規模に提示する初めての展覧会となった。会場ではCI、ポスター、立体アルファベット、プロダクト、彫刻へと続く各ジャンルが五十嵐の歩みの時間軸にあわせて有機的な流れをなし、最後のセクションを構成するレリーフや彫刻作品は屋外のインスタレーション作品とともに最終的にそのまま自然に溶け込んでいくかのような。といっても情緒的な自然観に回収されるのではない。五十嵐威暢という「ヒト」の制作行為が自然を編み込んだひとつの環境としてそこに立ち上がっているのだ。

本展はまた、五十嵐が学生時代に大きな影響を受けたという、「環境」というキーワードでデザイン、建築、美術を横断した展覧会「空間から環境へ」展（1966年、松屋銀座）への時代を超えたアンサーソングでもあっただろう。

ところで、筆者は本展の図録にデザイナーとしての五十嵐というテーマで、その活動の特徴について寄稿した。その要点としては、第一に五十嵐は戦後日本のグラフィックデザイナーのコミュニティやその制度性からいち早く浮上してグローバルな活動を行ったこと、第二に立体アルファベットがデザインとアートを行き来しつつ両者を発展させるための横断装置として機能したこと、第三に海外デザイン事例集の編集者や国際的なデザインイベントのオーガナイザーとして活動したことである。とくに最後の点については、本誌と五十嵐のかかわりは深く、『アイデア別冊 アメリカ西海岸のグラフィックデザイナー』（1975年）をはじめ数々の編著を刊行している。

展示では構成上触れられていなかったが、制作の影に隠れがちな、この編集するという側面が、五十嵐の知見やネットワークを広げる重要な側面であったことを、付言しておきたい。（KM）



1



2



3



4



5



6



7



8



9

札幌美術展 五十嵐威暢の世界  
2018年10月6日（土）～11月25日（日）  
札幌芸術の森美術館

撮影：[1-6, 9] 酒井広司, [7, 8] 羽田麻子